パニックが増加している」U子等、退行的な現象もあり、思春期の波を乗り切らせる難しさを痛感すると同時に、この現象も青年期への一つの通過点としてとらえ、次期での安定を見通していきたい。

〔7〕 考察と今後の課題

中学部の生徒にとってからだづくりとは何かに悩んだ初年度、中学部の生徒のからだづくりに「楽しんで力いっぱいからだを動かす」姿をイメージし、「遊び的労働を重視した生活単元学習」を導入した2年次、どうしたらどの子も「楽しんで力いっぱい……」の姿が実現できるかと「授業づくり」に力を入れた3年次、「授業づくり」を更に進めながら、過去の取り組みをもう一度見直したり確認した4年次と、からだづくりへの取り組みも4年を経過した。どの年も悩み、模索しながらの実践であったが、教師集団で真剣に討議し取り組んだ貴重な4年間の積み重ねだった。

「からだ」をあえて強調しながら、身体だけではなく心を含めたからだづくりこそ発達と障害に応じた教育には欠かせないものであり、その根底には「強制される、やらされる」教育ではなく、「意欲を持って、楽しく取り組む」教育の大切さを強調する結果となった。特に身体の急速な発達だけでなく心理的に揺れ動く中学部の生徒にとって、身体に直接的に働きかける取り組みと同時に、「やりたいことで、自分たちで見つけながら……」といった生活単元学習への取り組みで「**意欲・やる気・集中力」等の心づくり**を重視したことは大切な取り組みであった。ここで培った豊かな心が高等部教育で底力として花開き、社会的自立に向けて邁進する生徒たちの原動力になることを確信する。

指導に関しては、4年間の実践で常に次の3点が課題として残っていった。

① どの子にも楽しんで取り組める題材選定、教材・教具の工夫、援助や手だて。

② 学習したことが着実に積み上っていく指導計画の立て方、記録のとり方。

③ 育ち、伸びてくる子どもをどう捉え評価するか、評価法とその尺度。

これ等は、障害児教育にとって日常的であって永遠の課題として、次のテーマに引き継いで行きたい。

テーマは変わっても障害児教育は、その遅々たる発達を信じ、一人ひとりを大切にしながら、一人ひとりに合った社会での自立をめざしていくことは不変であり、そこで問われるのは教師の確固とした教育観である。教師がどれだけ暖かく生徒を理解し、真剣にぶち当っていくかどうかが一人ひとりをその子らしく生かせるかどうかの根本的な違いである。この4年間の多くて実践が、その教師像の上に立ったものであることを実感している。どの子もその子らしく生かせる教師で常にありたい。

◎尚、文中の生徒名はすべて仮称であり、その発達と併せ持つ障害は次の通りである。

1年	発達の程度	障害	2年	発達の程度	障害	3年	発達の程度	障害
Y男	4.0～5.0歳	ダウン症	K男	2.5～3.0歳	ダウン症	S男	7.0～8.0歳	言語障害
T男	4.0～5.0歳	てんかん	Y子	4.5～5.5歳	情緒不安定	R男	7.0～8.0歳	CP後遺症
U男	6.0～7.0歳	プラタウィリー	M子	6.5～8.0歳	情緒不安定	N子	5.5～6.5歳	自閉的傾向
H子	4.0～6.0歳	CP後遺症				U子	5.5～6.5歳	自閉的傾向
A子	6.0～7.0歳	ダウン症				R子	4.0～5.0歳	ダウン症